

慶應義塾大学 S F C 2008年度秋学期 古石篤子「言語と教育」 最終課題

# 学校英語教育における大学生の人材活用の提言

～普遍的コミュニケーションのための英語教育と外部人材活用～

総合政策学部2年：遠 藤 忍

(70701546 / s07154se@sfc.keio.ac.jp)

## 目 次

### I. 私の「英語」観

「英語が使える日本人」は無理  
社会変化と『インタラクション』

### II. 「地域人材」の今

「地域人材」という可能性  
地域人材の不活用

### III. 大学生の現場参加

英語と接する大学生  
等身大の「大学生」  
私自身の現場参加  
おわりに

### 参考文献

(2,127字※)

※字数のカウントは、本編の見出しから数えたものです

## I. 私の「英語」観

### 「英語が使える日本人」は無理

中学校学習指導要領では、日本人全員が「英語を理解し、英語で表現できる実践的な運用能力<sup>1</sup>」をもつことを英語教育の目的としている。

しかし、日本語が多数派の日本において、英語を使う必要のある状況があるだろうか。在日外国人の全員が英語が話せるわけではないし、話せてもこちらから英語で交流する必要はない。

また現在の学校英語教育では、英語に接触する時間が少なく、ある年齢を超えてからの学習は、個人によって到達度に際が生じるため<sup>2</sup>、全員が実践的な英語運用能力を身につけることは難しい。

それでも日本人全員が英語を学ぶ必要があるとすれば、それはなぜなのか。私の答えの中で最も重要視しているのが、

- どんな言語でも通用する普遍的コミュニケーション能力(=自己表現と他者理解の素養)の養成である。

### 社会変化と『インタラクション』

社会が変化していく中で、家族・学校・会社・地域などにおける人との接点が薄れてきている。子ども達を取り巻く「新しい荒れ<sup>3</sup>」(村山,1996:p.52)の発端は、「意味や感情をやりとり<sup>4</sup>」(齋藤,2004:p.2)=コミュニケーションの能力の低下にあると考える。

だからこそ、今の子ども達には他者と『インタラクション(=相互作用)』できる力が必要である。

齋藤は「コミュニケーションできるオープンな身体を、英語を道具にして養う」ことが出来るとしている(2004:p.106)。お互いの体が「響き合い」(齋藤,2004:p.74)、双方に良い影響をもたらすことができるようになれば、感情をむき出したり、逆に閉じこもったりせず、他者と向き合えるようになる。学校英語教育は、子ども達にこうした素養を身につけさせるために行われるべきなのだ。

## II. 「地域人材」の今

### 「地域人材」という可能性

昨今、教師ではない地域の人材を教師のサポーターとして登用していく動きが見られる。現に小学

校の外国語指導では、学級担任のサポート役として、「外国語に堪能な地域の人々の協力を得る」ことができるようになってきている。

チーム・ティーチング(TT)、少人数・習熟度別、ALT、小学校英語など、新しい英語教育の流れが進むに連れ、現場の教師達の負担は増えていく。地域人材は、教師の負担を和らげるだけでなく、教師数確保と綿密な指導の実現という効果がある。

さらに地域の人材が教育現場に入ることによって、生徒達はいつもの教師達とは違うフィルタで世界を見ることが出来る。これはインタラクションの機会を増やすと共に多様性への気づきや国際理解に繋がる。

### 地域人材の不活用

しかし、文部科学省の調査<sup>5</sup>によると、中学校英語における地域人材の活用率は約0.7%ときわめて少ない。小学校対象の調査<sup>6</sup>では、地域人材の活用時間数はALTのそれと比較して、約1/4程度となっている。

地域人材の活用が小さい原因が、単に人材不足だとするならば、私はここで、大学生が「地域人材」として学校英語教育に積極的に関わっていくことを提言したい。

## III. 大学生の現場参加

### 英語と接する大学生

現在、多くの大学がコミュニケーション型英語教育を盛んに行っている。個々のレベルの差はあれど、多くの学生が英語を用いたディスカッション・プレゼンテーションを経験している。

また、大学生が中高で学んできた学校英語のスタイルは、教科書改訂が3～5年のスパンで行われることを考えれば、現在のカリキュラムと大差はないといえる。

こう見ると、現在も英語使用の立場にありながら、現行カリキュラムに近い形で学んでいた大学生こそ、地域人材として適任といえる。さらに、大学生は子ども達が持っていない刺激的な知的世界を子ども達に見せることが期待される。

## 等身大の「大学生」

さて大学生は、教育実習生(子どもからすれば「先生」として、また「先輩」として教育現場に関わることができる。しかしこれらの関わり方は、子ども達と大学生の間を分け隔ててしまう。

重要なのは、大学生が等身大の「大学生」として子ども達の中に入って行くことだ。

先生や親・地域の大人よりも、子ども達と年齢・目線の近い大学生の方が、子ども達とオープンにコミュニケーションすることができる。まるで「おにいさん」「おねえさん」として接することで、子ども達も安心してコミュニケーションできる。大学生が学校英語教育の外部人材に適する理由の2つ目が、ここに存在するのだ。

## 私自身の現場参加

私自身、大学生として教育現場に参加しているので紹介する。

茨城県は毎年、中学生を対象とした英語の対話コンテストを実施している。私は、自身の出身校からの出場者を対象に、放課後の英会話指導をサポートしている。市内大会に向けた英会話の実践練習や表現指導を行い、夏休みに入ってから近隣学校との合同練習のサポーターも務めている。

実際に大学生として現場参加して、子ども達のコミュニケーションに対する態度に変化が出たことが肌で感じられた。出身校の教員からも、こうした参画に対して好意的な評価を頂いている。

## おわりに

コミュニケーション能力がより問われる時代だからこそ、学校英語教育が果たすべき役割は大きい。そして大学生という立場だからこそ子ども達に与える影響が存在する。この提言が、学校英語教育の現場に新しい流れをつくることを願ってやまない。

## 参考文献

- 1 文部科学省(2008),『中学校学習指導要領』(第2章各教科 第9節外国語 第2 各言語の目標及び内容等 英語 2内容 (1)言語活動)
- 2 古石篤子(2008),『言語と教育(4) -ハンドアウト』および 白畑知彦他(2004),『英語教育の「常識」「非常識」』大修館書店
- 3 村山士郎(1996),『いじめの世界が見えてきた』,大月書店
- 4 齋藤孝(2004),『コミュニケーション力』,岩波新書
- 5 文部科学省(2008),『英語教育改善実施状況調査結果概要(中学校)』,http://www.mext.go.jp/b\_menu/toukei/001/06032211/001/001.htm (2009.01.10現在)
- 6 文部科学省(2008),『平成19年度小学校英語活動実施状況調査 集計結果』,http://www.mext.go.jp/b\_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm (2009.01.10現在)